

楽しく防災活動。日常的な生活防災。

近い将来の発生が予想されている南海トラフ地震では、平成23年3月に発生した東日本大震災をはるかに上回る被災規模になることが想定されています。また、局所的な大雨や大型化する台風に伴う風水害も大きな脅威となっています。

平成26年度自主防災組織合同



町では毎年、地域による自主的な防災活動に取り組むための研修会を開催しています。平成26年度自主防災組織合同研修会には、地域自主防災組織の関係者、自治会の防災担当者、消防団など173人の参加がありました。
▶問合せ 危機管理グループ ☎079(435)0991

研修会では、災害に備えて、普段からどのような地域づくりを進める必要があるのかについて、加古川グリーンシティ防災会会長 大西賞典氏を招き、楽しく長続きする自主防災活動をテーマとした講演会を実施しました。

楽しく防災活動 日常的な「生活防災」

本日のテーマは「楽しく防災活動」です。今では、楽しく防災活動というところ、そこそこ受け入れていただけるようになってきました。しかし10年ほど前までは、非常にお叱りを受けていた時期もあります。震災で、家族などを亡くされた方がいる中で、楽しく防災活動とはなんだということ、お叱りを受けたのです。でも私たちは、これが地域での防災活動が継続する「もと」であると考え、その信念は曲げないということをやってきました。これが20年の成果として、

いろんな所で講演させていただく今日につながっていると考えています。災害というのはいつ来るかわからない非日常的なものでも、しかし、防災活動というものは日常化することができないかというのが私たちの考えです。それが「生活防災」です。

なぜ地域で防災活動なのか

播磨町でも地震や津波がやってくる可能性があります。大きな地震が起こったら、テレビのスイッチをつけてください。それで南海トラフ地震がおこった、高知がやられた、串本がやられたというのが、たぶん5分後10分後で、次々に情報が流されます。そこから地震の規模をしっかりと確認してから、明姫幹線から南の方は家の鍵を閉めて、避難を始めてくださいとなるでしょう。

その段階では、行政からは避難勧告とかはできません。地震が発生してから数分後です。考えてみてください。5分くらいで

人間何ができるか、そんなにできるものではない。町の危機管理グループでも5分で町長に連絡して、副町長からと順序を追っていたら5分はあつという間です。それをアテにしていたらいけないです。不適切かもしれませんが行政をアテにしているはいけません。

行政がしっかりしているから、何か言ってくれるだろうと思うと大間違いです。「播磨町役場です」「避難勧告です」この言葉を持ってはいけません。自分で情報をしっかりと取りに行くことです。素早くしっかりと情報を得るために、「どんな災害のときに、自分たちはどうなるのか?」これを地域のみんなが勉強するのは、自治会単位が一番やりやすい単位なのです。

危機管理グループの職員を呼んだら、ちゃんと災害図上訓練をやってください。これをやるからこそ住む方々は、自分の地域がどうなるのかわかるわけです。



かわらず、同じように伝えられる。市民で行う防災活動は、どのようにも変化できます。何の縛りも法律もないのです。法律で「このようにしなさい」というのは、市民に対しては言われていません。災害対策基本法というのがあるのではないかと思う方がおられるかもしれませんが、あれは行政が担うことが書かれているものです。

たとえば個人情報もそうです。極論ですが、地域に自分の情報を出さないという人は、自分を守ってもらわなくていいと言っている人です。守ってもらわなくていいと言っている人を、防災のチームに入れる必要はありません。守って欲しくない人は、べつに活動しなくていいです。備えなくていいです。そのかわり、我々が炊き出しを始めた時に、並ばないでほしいということなのです。

加古川グリーンシティ防災会

加古川市加古川町平野にあるマンション「加古川グリーンシティ」に居住する約590世帯で構成する自主防災組織。1998年(平成10年)6月に、既存の「自衛消防隊」と「防犯防災委員会」を一体化させて「加古川グリーンシティ防災会」として設立されて以降、多彩なアイデアを仕掛け、住民同士のつながりを築いている。

加古川グリーンシティ防災会

Webサイト

http://www.greencity.sakura.ne.jp/greencity_bousaikai/index.html

http://www.greencity.sakura.ne.jp/greencity_bousaikai/index.html

「防災」の意識改革

防災活動は、社会的には非常に必要なことです。ところが、眉間にしわをよせて「今から防災の話をお願いします」と言われたら、かしまって聞かないといけない状態になる。本当にこれで人が集まるのでしょうか?

今日の研修会に出席されているような方だと、1時間程度は我慢できます。でも、土山駅前での防災講演というような演説をして、みんな足を止めて聞きませんか?聞かないでしょう。当たり前の話です。聞く人のことを考えずにしゃべっているわけですから。これでは人は集まらないし、防災の話も聞いてもらえない。

大抵の防災の講演会がこんな状態で、ほとんどの人が寝てしまします。これは皆さんの責任

ではないです。眠くなるのは我々伝え手側の責任です。防災を伝えていくうえで、防災を伝えるだけのスキル、技術、テクニックを必要としています。伝えるためにはどういったことをしていったらいいのでしょうか?おまけを付けることです。一流の企業もお菓子を売るためにおまけをつけるのです。子どものお菓子を売るためにお金を出しましたか?それとも、おまけが欲しいからお金を出しましたか?本心はどちらでしょう?これがおまけ、つまり楽しみなことです。おまけは重要です。

防災を防災と語らずとも、防災の役割を果たす

地域の方には、防災、防災と訴え続けても人は集まりません。ところが、我々が考えを改め、「防災を防災と語らずとも、防災の役割を果たす」というキーワードで地域活動を、防犯活動を、防災活動をやろうと決めたとき、地域の人たちが変わりました。

私たちが考えたのは、「土手の花見 防災の話」です。(p.6参照)

私たちは、このキーワードを絶対忘れません。大学の先生には「大西マジック」とか「人を

騙して方向づけている」と言われるのですが、騙してでも人の命を救えればいいのではないかと私は思っています。

自分たちの防災 臨機応変な防災を

私たちの活動も、最初はいろんな方から教えられたり、情報を集めたりしました。でも、自分たちのまちと合わないと感じることがよくありました。そこで私たちは、行政とかメディアの防災というものから、脱却しようと思いました。

これが地域の人たちにとって、守るべきものにとつて、いいことだと思ったらやり続けるべきです。そのために一歩踏み出すべきです。皆さんのところでやりたい防災をやればいいのか。隣のまちと同じように合わせる必要はない。私たちの地域はこれでいいのだと掲げれば、間違いなくその地域の人は動き出します。

「防災、防災」という必要はありません。祭りでもいいですし、スポーツ大会でもいい。直接的に防災を伝えるのではなく、上手く間接的に伝えることが大切です。

もう一つ大切なことは、臨機応変な防災です。地震も台風も一緒ではないですよ。にもか

命がけて人を助けてはいけない

えげつないです。しかし皆さん考えてください。炊き出しの場合であれば、炊き出しする側は食べていいのです。

今の日本の中では、並ぶ側の立場が大きく、食べるのが権利だというように位置づけられています。でも、本当は炊き出しをする側がしっかりと食べるのが最優先なのです。炊き出しをしている人たちが体力維持できなければ、炊き出しを受ける側は死んでしまうと考えていいのです。しっかりと食べたあと、炊き出しに並んでもらった人たちに提供をする。ここをしっかりと地域の人たち、町の人たちに、伝えるべきです。

逆に言うと、炊き出しをする側の人たちばかりになったら、みんなで分け合って食べられないのです。そういう想定は防災訓練も必要です。



患・脳疾患が原因で亡くなったといわれています。

避難生活の中で、飲み物を我慢するため、体の水分が不足したことも要因の一つだと考えられています。なぜ飲み物を我慢するのでしょか？トイレに行きたくないからです。トイレが混んでいる、汚いなど、特に女性は活いトイレで自分が見られるのも嫌がりま。だからトイレを我慢し、それによって亡くなった方が多かったです。

だから、トイレを使う順番とか、きれいなトイレを維持できるかということを防災訓練に入れるべきなのです。地震の揺れで助かった命、生き残れたはずの命を助けない、そういう考え方を含めた防災訓練をやってほしいと思います。

命がけて、人を助けてはいけません。今日は若い消防団員も出席されています。消防団の皆さんに伝えます。まずは自分の命を守ることに専念してください。消防団員はこれを守ってしっかりと守ってください。命がけて人を助けてはいけません。命がけて人を助けても、君たちの大切な家族は喜びません。

命がかかるなと思ったら、見捨ててください。これは精神的にきついです。播磨町の消防団はしっかりとっているかもしれない。でも地域の皆さんも、消防団をアテにし過ぎてはいけません。彼らにも自分の大切な人たちがいる。その人たちに命を預けてはいけません。

人を助けるときには、自分の命を守るかを判断してから、対応をするということを感じていてください。だから防災活動は、しっかりと決められたマニュアルではなく、臨機応変にその都度、その都度変えていくということになります。

防災活動の問題点

防災活動にもいろいろありますが、避難誘導、消火、救助、応急処置、避難所運営、炊き出しなど、これらには共通点があります。すべて「災害が発生したあとの事後処理」の活動

です。

これを防災訓練と称してやっているところが多すぎます。これは生き残った人だけが助け合うシステムの構築です。生き残れる前提で、防災訓練が実施されているのです。災害では死なないつもりで、このような活動をやっていくのです。

死なないための防災活動

防災活動というのは、一度着眼点をしっかりと決めるべきです。まずは、災害の瞬間に死なないということです。阪神・淡路大震災の時には、犠牲となられた方6千434人のうち直接死は約5千500人です。直接死というのは、地震の揺れで亡くなった方です。そのうちの8割が15分以内に死んでいます。6時くらいまでは5千人近くの方が亡くなったといわれています。

その方々を救う方法を考えたら、重要なのは15分以内の救命です。これは人をアテにしている暇はないということです。コミュニティは大事です。でも、15分以内に地域の方が来てくれて命を助けてくれるかといえは、本当はあり得ないことです。一人ひとりが備えていたら、5千人近くは死ななかったのではないのでしょうか。やはり、防災活動というのは、

自主防災活動とは個人個人の防災活動のこと

自主防災組織とは、自主防災活動を実施している人の集まり

自主防災についてしっかりと考えてみましょう。自主防災をグループ活動、チーム活動だと勘違いしている人がいます。自主防災組織は自主防災の集まりです。

自主防災は、自分自身が他から干渉を受けず独立して備えることです。他とは独立した備えをしっかりとすることです。

あなたに必要な備え

自分に必要なものは自分にかかりません。同じ家に住む家族の中でも備えは違つのです。ここにいる人たちも、個々に違います。皆さんの本当に必要なものは何ですか？それは、非常持ち出し袋に入っていますか？視力が低い人は、メガネがあれば、避難所で情報がありました。補聴器がないから、館内放送があっても何を言っているのか聞こえないというのは困ります。入れ歯がなかったら避難所に行つて、食事が配られても食べることができません。あとは常備薬です。私も血圧の薬は常に1週間分力パンに入っています。

生活防災のある日常

それが備えてあるかということです。これが非常持ち出し袋に入つて初めて防災のスタートです。これが出来ずに、地域防災などおかしな話です。生活防災の次のステップは生活防災の構築です。生活防災とは、毎日の暮らしの中に防災の意識を取り込んでいくことです。特効薬はありません。でも、難しいことでもありません。できることから、関心があることから始めてください。生活防災とは、仕事、家事、勉強、お祭などのイベントの中で、防災を意識して生活することです。

毎日のあいさつも生活防災

防災と云えば危険回避ばかりを考えてしまうのですが、そうではありません。

私たち加古川グリーンシティ防災会はよくメディアから防災訓練をいつやりますかと尋ねられます。そう言われたら、毎日と答えます。私たちは、毎日のあいさつが大きな防災訓練になっていると考えています。

死なないのが大事なのです。

ところが日本全国、無防備と言われる防災活動をやっている。災害に対して、構えるということをやっていない。やられた後のやり過ごし方しかやっていない。そこをしっかりと改めてほしい。防災活動の目指すところというのは、「人が死なないための活動」、これ以外はないのです。

自分が大切な人の命を守るという気持ちを忘れてはいけません。そう考えたら、家具の転倒防止などは、やっていて当たり前なことです。子どもの部屋にタンスがあるとするば、つっぱり棒を2千円程度で購入してそのタンスに設置すれば、子どもの命が助かるのです。2千円かかるのが嫌ならば、子どもが寝ている方向にタンスを向けないことも家具の転倒防止のひとつです。

生きるための防災活動

ところで、地域の中で、または自分の備えの中で、トイレの準備はできていますか？

阪神淡路大震災で亡くなった6千434人のうち922人が間接死だといわれています。間接死とは、地震の揺れでは命が助かったのに、その後の避難生活の中で亡くなった人のことをいいます。この間接死の8割近くが、心疾

ちよっと考えてみてください。大地震がきたとき、あなたとあなたの家族は、備えができた家の中で無事だったとします。でも、両隣の家は大変なことになっていました。片方の家はいつもあいさつをしてくれる付き合いのある家で、もう片方はあいさつをしない、付き合いのない家だとしたら、あなたはどちらから助けに行きますか？あいさつをする家だと思えます。あいさつをしないほうの家は、思い出さないと行ってしまいますね。いざというとき、自分の家族が大丈夫だったら、次は付き合いのある人に意識がいくわけです。普段の付き合いがない人は、付き合いがある人の確認ができたとになりませぬ。

だから私たちはあいさつ運動を防災訓練の一番根幹においているのです。あいさつから始めると、いろんな人の参加が推進されます。参加が推進すると、もっと人を集めようとイベントが開催されます。

日常の楽しいイベントの中に、防災の意識を取り込んでいく「生活防災」をお勧めします。

「土手の花見」の精神

～講義内容より～

昔々あるところに、毎年水害に悩まされる地域がありました。その地域では水害対策に、川に土手をつくって水害に備えられた。ところが、すっかり作られた土手が、毎年梅雨をむかえると決壊をしてしまう。

すっかり固めたはずの土手に小さな穴が開いて、土手を決壊させてしまうのです。土手を作った年は大丈夫でも、次の年にはなぜか土手の中に小さな穴が開いてしまうのです。そこで行政が調べたところ、土手の中の水分が原因ではないかとわかったのです。川の水に耐えている間に土手の中に水分が入ってしまふ。入り込んだ水は、その冬になって凍りつくのです。凍りついて春になると、春の穏やかさで凍りついた氷が解けた。その結果、それまで氷のあったところが穴になってしまふのです。

原因がわかったから、対策は簡単だと思いましたが。氷が解けたあとに、もう一回固めたらよいのです。ところが、できあがった土手をもう一度固めるには、大きな圧力をかけなければいけないということがわかりました。そこで、多くの人を集め踏み固めてもらおうと考えました。

行政は地域の人におふれを出すのです。「この町に住むもの全員〇月〇日に土手に集まりなさい。水害対策のため全員で土手を踏み固めます」というわけです。

ところがその日、人は集まりません。なぜかと悩んでしまうのです。その答えは簡単です。自分一人くらい行かないでもわかってくだらうという人が町中だったということです。これは防災でいえば集団的抜き事件です。自分だけ行かなくてもみんなが行ってくれるというのが全員だったのです。

そこで知恵のある方が言い出しました。「真正面から災害対策を語るから、自分たちの町は自分たちで守ろうなどというから駄目なのだ」と。また別の方は、「春先に花の咲く木を土手の周辺に植えて、花が咲いたらみんなで花見をしましょう。歌って飲んで踊って、みんなで楽しみましょう。桜の木などがいいですね」と言うのです。行政にしてみれば土手を踏み固めてほしいと言っているのに、全然話が違ふ。人の命を守るための活動でも集まらないのに、桜の木を植えて人が集まるのか



というわけです。

でも知恵のある方は、「やってみましょう。また、花見はお祭りになるので、歌ったり、踊ったりお酒や団子などおいしいものをふるまってあげてください。そのための予算をだしてください。もし人が集まらなかつたら、自分を煮るなり焼くなりしてください」といったのです。

去年に植えたまだ小さい桜の木、その桜の木に数輪の花が咲きました。行政から「〇月〇日に土手で花見会をします。歌って踊れるものには、酒、お菓子をふるまいます。家族から何人出てもいい。家族全員のお酒、お菓子をもらえる」というおふれが出ました。

当日は、多くの人が集まりました。花見客は一日中、知らず知らずに、防災対策、治水対策、水害対策のために土手を踏み固

めていくのです。桜が咲いている間は毎日そこに集まっているのです。それが毎年継続されています。そうすると土手は決壊することなく、安心して生活できるようになったのです。

これを防災的に解説すると、ハードウェアというところの土手、桜です。それからソフトウェア、花見のイベントという知恵と楽しさです。これをするこ

とで長期的に防災文化というものをつくっていきました。小さな範囲で防災訓練をやっているといけない。それでは文化にならない。役員が代わったら継続できない。人が代わっても継続できる。お祭りなどがそうです。おまけ付のイベントをやるのが重要。そのために知恵をつかふこととオリジナルの防災をつかふ。それが大事なのです。

そのためには理解しましょう。知っていると理解するとは違ふのです。物事をしっかりと理解する、定義するということ。理解をすると、災害時にどちらかという時に、こちらだと言いきるだけの判断力がつく。当たり前のことをなぜそうなるかをしっかりと理解することが大事です。

町内での事例 『は～とふる野添』

▶問合せ 野添コミセン ☎078(943)4825

野添コミセン区では、は～とふる野添(蓮池地域づくり推進協議会と連携)が「災害への備えと減災の具体策」に重点をおいた地域づくりを行っています。

住宅地図を広げながら、災害時をイメージして危険箇所マークを入れたり、避難経路や避難方法などを話し合ったりする「DIG訓練」のほか、ふれあい運動会のプログラムとして災害時を想定した訓練を競技に盛り込むなど、様々な機会をとらえて地域全体で防災に関する意識を高め、情報を共有する活動を行っています。

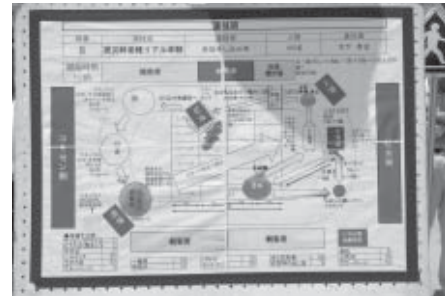
活動のアイデアは、なにげない立ち話や雑談を集めたようなトークデー(テーマを設けない自由参加の会を毎月19日に野添コミセンで開催)から生まれてくることも多く、住民ニーズがそのまま活動に生かされています。

蓮池地域づくり推進協議会は、兵庫県が主催する『地域コミュニティアワード2012』でいきいき広場賞を受賞し、各地から注目される地域活動を防災活動にとどまらず幅広く展開しています。

6月に催された野添地区ふれあい運動会でのプログラム「被災時避難リアル体験」



▲車いすで人が人を救護所に運んだり、一輪車で土嚢を運びビルの周りに積み上げたりして、笑顔と声援のなかで防災活動に多くの人が参加しました



防災コラム

3月 地域での防災の取り組みがよくわかりません

▶問合せ 危機管理グループ ☎079(435)0991

難しく考える必要はありません。普段の自治会の取り組みの中で「できること」から始めましょう。まずは、恒例になっている行事に防災の観点をに入れてみてはどうでしょうか？

ポイントは、「いままでやってきたこと・これからやっていくこと」に防災を取り入れて、その意義を深め、無理なく長続きする活動にしようということです。

これは播磨わくわく講座でもお話をさせていただいたのですが、次のようなことが理由として挙げられます。

- ・防災のためだけに参加者を募っても参加者が集まりにくい
- ・新しい取り組みをゼロから考えるより、既存の取り組みを活用するほうが効率的
- ・地震への取り組みは中長期の取り組みが必要であり、それだけ継続的な活動が必要(単発の防災イベントだけでは効果が得られにくい)
- ・そもそも自治会や自主防災組織の役員の方々は現状でも忙しい

このようなことから、播磨町では「いままでやってきたこと・これからやっていくこと」に防災を取り入れる(防災的な意義を付け加える)工夫をお願いしています。例えば次のような考え方です。

・あいさつ運動 隣近所の方の顔と名前が一致すれば、災害時にも素早い安否確認が可能になると思います

・ふれあい・いきいきサロンや夏休みのラジオ体操 地域の高齢者や子どもの把握や見守りが可能になると思います。また、「ふれあい、いきいきサロン」を開催する場合には、播磨町社会福祉協議会の支援が受けられる場合もあります

・防犯パトロールや溝掃除 地域の危険箇所の把握にも役立ちます

・まつり 多くの参加者が見込まれるまつりでは、昼食の準備を炊出訓練にしてみましょう。その際には防災倉庫の資機材も活用できると思います

・迷惑駐車撲滅 万一の際、避難路が迷惑駐車でふさがれては素早く逃げられません。避難路確保の一環としても取り組んでみましょう

・コミセン活動 自治会間の協力を通じて、災害時にもお互いの支援が可能になるのではないのでしょうか？

各自治会では、そろそろ来年度の準備を始められていることだと思います。その際に、恒例行事に防災の観点を盛り込んでみてはいかがでしょうか。また、役員体制も重要です。地域(一部地域を除く)には自主防災組織がありますが、その代表者は自治会長と兼務されていることが多くあります。他の組織・団体や自治会員との調整を考えるとやむを得ないと思いますが、実質的な負担を分散する工夫も必要ではと考えます。